或は芽立の毛), アカヤシホ (花), アカナス (果), アカエンドウ (花と種皮) などは耳にはよいが說明には不足する。一方アカジクー, アカゲー, アカバー, アカミヤクーなどはまことに響きが悪い。新らしい名をつける時に音韻上の優秀と說明上の滿足との間の調節は存外にむづかしいものであることを痛感する。

○支那產のハクチヨウゲ (久內淸孝)

最近林業試驗場の林彌榮氏が同試驗場內で一種のハクチヨウゲを見出された。これは Handel-Mazzetti が *Serissa serissoides* Druce として Symbolae Sinicae で扱はれたもので, 從來 *S. Democritea* Baill. の名で知られ, また Plantae Wilsoniae Vol. III に *Leptodermis nervosa* Hutchinson として當時新しく記載されたものである。一見, 我國のシチヨウゲの樣に見えるが, 柱頭は二叉し, 蕚裂片は披針形で約3mm 邊緣に睫毛がある。和名は無い樣であるが都內に進出する樣になると和名が入用になる。

○Moricandia を橫濱でとる (久內淸孝)

余は橫濱市山手町で一種の *Moricandia* を得た (27 VII, 1945)。そうして, それは *M. arvensis* DC. であると考える。從來中國各地から知られて居る *Orchophragmus violascens* O. E. Schulz (= *M. sonchifolia* Hook.) オホアラセイトウとは別のもので, 歐洲原產のものと思ふ。莖葉は廣楕圓狀で抱莖脚, 殆んど全緣又は粗齒緣, 葉身は長さ 2-18cm. 幅 2-7.5cm. 兩面無毛, 下面帶白色。花は紅。角果方形長さ約 9.5cm 先端は方形を呈せず嘴狀, 嘴狀部の長さ約 2cm。種子は汚褐色, やゝ柱狀, 長さ 2mm (角果の方形を呈するは, 各心皮が弧狀を呈せず, 其中肋を境として各半が直角に近く彎曲し, 各心皮の中肋と, 兩癒合緣とで四稜を現すによる。果實裂開に際しては嘴狀部を殘し, 心皮のみ離脫す, 故に嘴狀部は兩癒合緣のみにより構成せらる, 當然のことながら附記す)。和名は未だなきものゝ如し。依て屬名に名を殘したる S. Moricand を記念して, モリカンドソウとするか, 又は同氏の國籍に因みイタリアソウとでもしたらよいと思ふがいかゞでしよう。實物は東京科學博物館の腊葉室にをく。

和名を有する近緣のものとしては, 中井博士が植物學雜誌 37 (1923) p. 69 で, 朝鮮のものに與えたオホアラウセイトウがある (北川博士は滿洲國植物考にハナダイコン, ハナスヾシロを倂記されたが, この二名は植物名彙によれば *Hesperis matronalis* Linn の名であるから, 同一物であることが證明されない限り用ひたくない) が, 今余がこゝで紹介するものは, 出來ることなら, 他屬と混同されない樣な名が欲いので, 叙上の樣な新名を考へたのである。

○ウスイロヤクシサウ (新品種) (津山尙)

1945 年 11 月 15 日, 武州天覽山に於て資源科學研究所植物學部の一行が採集を試みた際, 頂上附近に於てヤクシサウの花色が極淡黃色で, あだかもアキノノゲシのそれの如きものを二株發見した。その時一行中の籾山泰一氏とはかり, forma *pallescens*

の名を與へることにした故ここに發表する。

Paraixeris denticulata Nakai forma *pallescens* Momiyama et Tuyama, f. nov ——*Lactuca denticulata* Max. forma *pallescens* Momiyama et Tuyama in sched. ——Flores pallide lutei ut in *Lactuca indica* Merrill. ——Prov, Musasi, in monte Tenranzan (Momiyama et Tuyama)

○アメリカフヨウ（新稱）（久内清孝）

東京都，大田區，鵜ノ木町，佐々木一郎氏の園に一芙蓉がある，之を研究して見たら *Hibiscus oculiroseus* Britt. に該當することが判つて來た，依て之にアメリカフヨウの新稱を與へる。本品は *H. Moscheutos* Linn の一形で，たゞ花の中心に大赤斑があるに過ぎないので，區別しなくてもよいと云ふ意見もあり，至極尤だと思ふが，こゝでは L. H. Bailey の園藝百科辭書に從つてをくが，この方法で行けば日本のムクゲなども數種に區別しなければならない。しかし，それはそれとして，次にこのフヨウの形狀を概記してをく。

多年性で數本叢立，地上莖は東京に於ては一年生，高さ約 110 cm. 綠色（淡紅花のものでは多小紅彩を帶ぶ）圓形，毛あり，徑約 1cm 莖頂に 3—4 花をつく。葉は有柄，柄長 5—8 cm，淡紅花のものでは上面紅色を帶ぶ。葉は廣卵楕圓狀，漸尖頭，基脚微に心狀，有齒緣（下部のものは三淺裂の傾向あり），上面の毛は漸次脫落するも，下面は灰白色で短絨毛滿布す。花は有梗，梗の長さ 4cm，有節。花は大形 12—3cm，完全に平開せず，花色は白乃至淡紅，中心は大赤斑あり，副蕚は線狀，蕚片は三角狀披針形，漸尖頭，花瓣は楔形に近し。蒴果はやゝ長みがゝつた球形，尖端突起し 9 月頃には關節より脫落する。種子倒卵狀球形表面にはフヨウの樣な毛なく小隆狀凸起の散布を見る。米國南部の產。種名は赤い目即ち花心赤斑點を有するを因む。

○オホエビネの品種タカネとアルマン（前川文夫）

エビネに似て豐艷な黃色の濃い花瓣があり，唇瓣も比較的幅が廣いものをふつうキエビネといつて居るが，牧野先生は植物學雜誌 3 : 448（明治 22 年）ではソノエビネの總稱を提唱され，牧野日本植物圖鑑： 685（昭和 15 年）では花色そのものにもエビネへの移行ありとしてオホエビネと改稱された。色々の型はあるがその中で鮮黃のものをエビネ栽培家はアルマンと呼ぶし，外花蓋片の外側が淡褐色のものを伊藤圭介翁はタカネといふ由をソノエビネの條下に記された。いづれも德川時代の園藝上で生れた名であらう。

語源について今迄書かれたものは見當らぬやうだが，小生の考へて見たところではタカネはその特徵の花蓋片が淡褐色即ち飴色をして居るところから飴の古語たかねを用ひたものではないかと思はれ，アルマンは全部豐かな黃金色であるところから all monarch と西洋人のいつたものが訛つて殘つたのではなからうか。